

アストライアー

西浦愛梨

薬缶が空を飛ぶのなら

おもちゃは夜間に踊りだす

隣の家のおじさんは

きつと魔法を使うだろう

都会の星々だって

ネオンの陰に隠れて

少しおしごとをさぼっていたり、なんてね。

たまには闇に見とれたり

独りで紅茶をすすったり

田舎の星たちはそれを見て

きつと文句を垂れ流す

自分だって夜の闇に溶け込みたいのに

瞬くその刹那にしか

休むことが許されないなんて

あの日なくした消しゴムが

星にならないとは限らない。

いつのまに私の手を離れて

教室の端へ転がって

廊下を抜け外へ出て

階段を転げ落ちて

坂を上って降りて

ある時、一息に飛び立つ